

イノベーションと幼児教育の関係

学びの道教育研究所 池田 哲哉

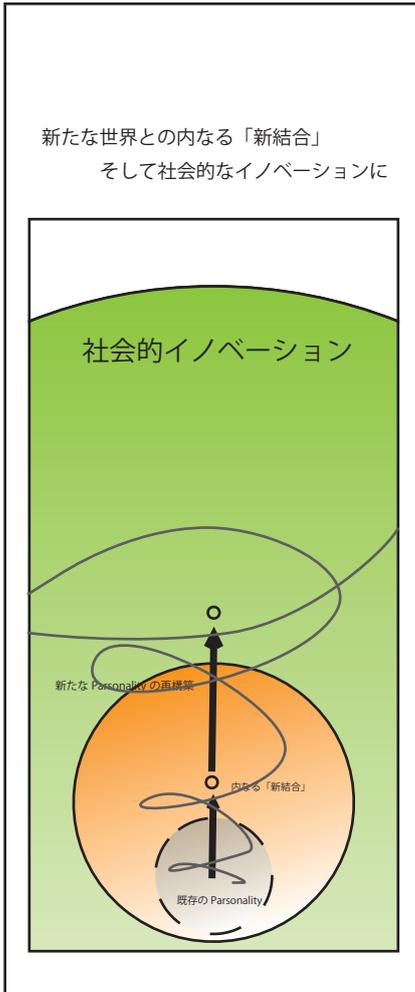
東京都文京区本郷 3-38-14NEOS ビル2階

TEL 03-3818-7787

email :iked@manabinomichi.com

■幼児教育で何をすべきなのか

幼少期に重要なことは、ノウハウを知ることではなく、「自分に真剣に向き合うこと」「本質に触れること」である。教育実践の場にいるものとして、将来社会的なイノベーションに貢献できる人間となるためには、この「向き合う」経験こそ最も重要なことではないかと考える。



■イノベーションを阻害するもの

イノベーションを阻害する要因である「新たな価値」に対する「既存の価値」、変革への恐れ、失敗への恐れ。このことは産業の世界だけにあてはまるものではなく、「子ども自身」の中でも起きている。

■「自分自身」を生きることの中にある答え

第一次反抗期にあたる3～4歳の子どもに起きている事例を考えるのに、親の言いつけ通りに行動する「いい子」を想像して頂きたい。親が愛をくれる「よい子の自分」を捨て去って、あるべき「本来の自分」を獲得するのは、大変な作業となる。時には必要以上に親を拒絶しなければならないことにもなる。ただ、幼いながらも自分の人格を定める「内なる声」に従って、自ら人格を設定していくしかない。

当然幼い者の「内なる声」は磨かれていないから、「お菓子が欲しい」とか「抱っこして欲しい」といったレベルが低い欲求に過ぎないかもしれない。この「内なる声」を磨き高めていくことが、「自分自身」を生きる道しるべとなる。

■「自分磨き」と新結合

一人の人格が、新たなものとの出会い、向き合うことができると、新たな世界との「新結合」が起きる。向き合うことのできる人格にとって「新結合」は、成長を促す重要な経験となる。人格成長を「自分」の未熟さに「気づき」→「磨く」→「成功体験」・「気づき」→「磨く」→「成功体験」・・・これを繰り返していくことで、幼いながらの「自分」「美学」「哲学」が生まれてくる。すると本来あるべき自分の姿を追求していくようになる。この成長スパイラルなくして、「自分自身」を生きる道はないのである。

「自分自身」の生きる道をたどらなければ「みんなを守りたい」とか「自分にとっての『美しい』を「人が楽しんでくれると嬉しい」といった本物の「思い」「行動規範」そして「品格」は生まれてこないのである。

■よりよい自分を創る成功体験・その先にある社会的イノベーション

こうしてよりよい自分を創る成功体験を積んでいくことが「内なる声」のレベルを上げ、自己変革の成功体験を経ていくことの先に、本物の社会貢献のイノベーションが待っていると考える。

■参考文献

- ・クレイトン・クリステンセン『イノベーションのジレンマ』・チクセントミハイ『楽しみの社会学』『Creativity』
- ・シャーマー『U理論』・J.M. ケラー『学習意欲をデザインする』・エドガー・シャイン『人を助けるということはどういうことか』

幼児から始まるイノベーション教育

～ありがとうから始まる成長スパイラル～

■イノベーション教育・幼児教育との関係

「革新的で社会に大きなインパクトを与える製品・サービス・ビジネスモデル・社会システム等を生み出す力を養う」(イノベーション教育学会開催案内より)のがイノベーション教育だが、幼児教育の段階で言及されることがほとんどない。

イノベーションを実際に起こすまでには、まだ時間がある幼児教育の場面で言えることは、「イノベーションを起こす資質を磨いているのか」というプロセスが重要ということである。

今回我々がやっている実践の場面から見てくること、どのような取り組みの可能性があるのか考えていきたい。

■イノベーション教育のプロセス

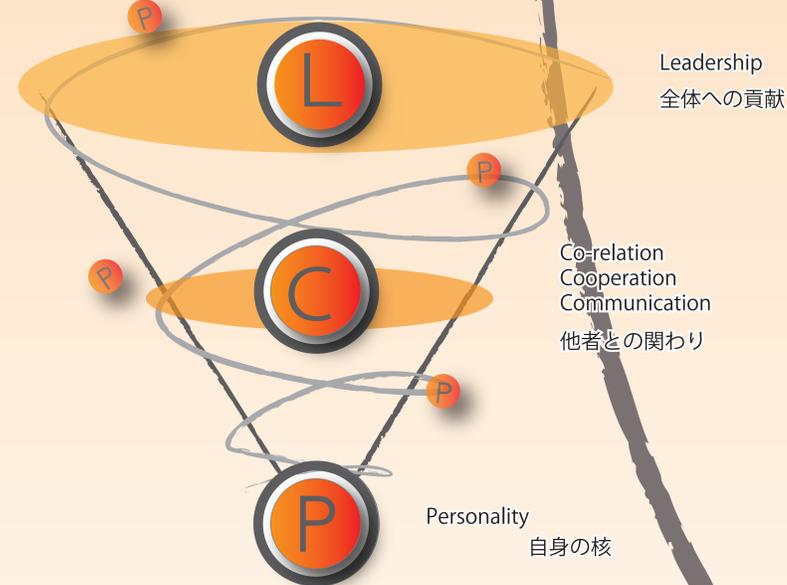
～既存の価値観を打ち破るもの「内なる声」が聞こえるか～

イノベーションを起こすには、既存の価値観を超える価値を作り上げることが必要。既存の価値観・既存の物にとらわれている人間には、既存の価値観を打ち破ることができない。

一人の人格が成長していく過程では実社会で生きていく以上、既存の価値観や物に支えられて発達していく。学生時代に問題に正解することを求められて育ったなら、不正解の答えを出してしまうリスクがある行動を取ることに躊躇を覚えるかもしれない。会社で働いていればその会社という価値に依存せざるを得ず、本当に会社のためになると確信していても、ある提案をすることが自分の立場を悪くする危険があると思えばその提案をすることに、大きな抵抗を覚えるかもしれない。

外側の価値観に優先する内側の美学・哲学を作ることは生易しいことではない。絶えざる自己変革を続けて「内なる感性」を高めていかなければ、外からやってくる権威・生存を脅かす恐怖に打ち克つことはできない。(「U理論」オッター・シャーマー参照)

■自らのうちにイノベーションを起こし続ける3つの要素



■イノベーションのジレンマは幼児の頭の中でも起きている

まだこの世に生まれて数年しか経っていない幼児でも当然同じことが見られる。外的な価値観は「母親の一言」だったり、「幼稚園の先生の導き」だったりする。典型的なものに「ピンクのうさぎ」と我々が呼んでいる事例がある。幼稚園や保育園では壁面にいろいろな絵を貼り付けて、楽しい雰囲気をつくる。そこでよく使われるのが、「ピンクのウサギ」である。子どもはそれを無批判に受け入れて、自分で絵を描くときも同じようにピンクのウサギを描いてしまう。3歳児であるとまだまだ物の見方が発達していないので、現実と違う色で描くことはよくあることだが、第一反抗期を経た5歳児にもなると自我が安定し、自らの判断を重視するようになるのであるが、子どもによっては「本当にウサギはピンクなの？」と促してもなかなか自分の判断を変えないこともある。子どもによっては「お母さんが言っていたから」などと言う場合もある。子どもも自分がコミットしている価値観から抜け出して、次のステップにすすむには、ジレンマが生じて成長押しとどめてしまうのである。(参照「イノベーションのジレンマ」クレイトン・クリステンセン)

■教育プログラム

既存の価値観にひきずられてしまわない、つねに成長し続ける「人格」を作るために、われわれはどのような教育のプログラムを作ることができるだろうか。

われわれはそれをP・C・Lという三つのステージに分けてプログラム開発している。「問いかけの技法」、「ストーリーの技術」、人格の成長を促す「12のカギ」、「茶道」、「ありがとうシール」、「インプロ」、「美術を使った教育」

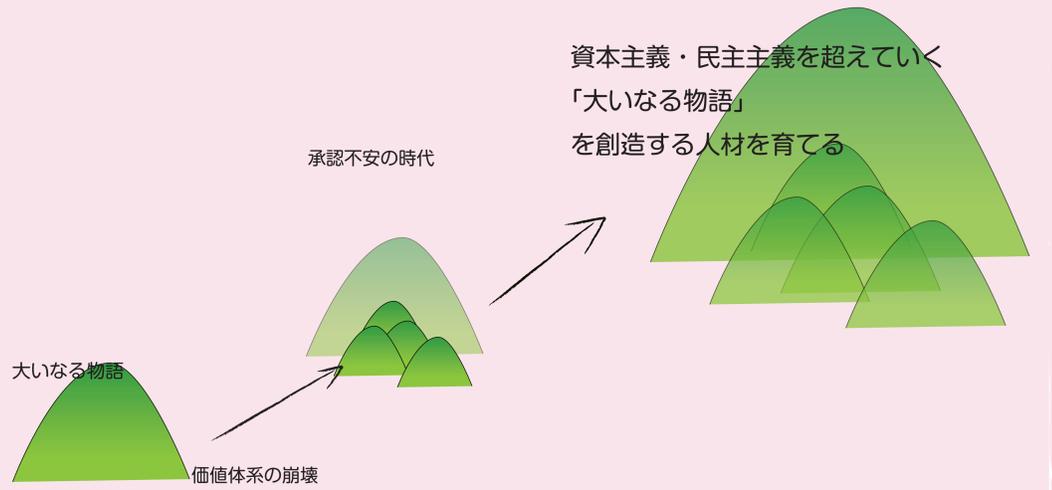
これらの手法は、子どもたちにとって非常に有効であり、子どもたちが短期間で真剣に向き合うようになることは、私共が感動をもって体験している。

■相手への貢献を知る・・・ありがとうシール

子ども達の大きな成長の原動力となるのは「人にありがとうをいってもらう」経験だ。このツールは人に「ありがとう」を言ってもらった時に、その人からシールをもらえる仕組みだ。人に貢献すればするほどシールがたまり、自然と人に貢献することの難しさや喜びを知ることができるようになっていく。このツールを使うと、規範の意識が高くて、リスクの多い創造的な行動に移ることができなかった子どももリスクを冒してでもクリエイティブなことをして人に貢献したほうがよいことを知ることができるのである。この経験を繰り返していくと、多くの人々への貢献を実践できるようになる。

ありがとうが世界を変える

学校教育や受験産業はもとより経済、ビジネス界、また人材開発、和の文化等々のいろいろな領域と、私共のメソッドとのコラボレーションにより、新しい大いなる物語を作り出し、ハッピーコミュニティを作っていきたいと願っている。



大いなる物語がなくなった時代

社会全体に行き渡った価値観がなくなったのが現代の時代といえる。多様な価値観が社会の中で認められるために多くの人々が、自分自身に確信が持たなくて、不安を感じてしまう「承認不安」の時代になってしまった。(参照『認められたい』の正体・・・承認不安の時代』山竹伸二)自分自身に確信が持たないので、身近な人々に絶えず承認を受けなければ安心できない、精神的に不安定な状況が生まれてしまう。例えばフェイスブックで「いいね」ボタンを押してもらえないと、不安になってしまう状況のことである。一時代会社が終身雇用制が維持できたころであれば、会社という大きな集団の中で自分の位置が確認でき、「集団的承認」を得ることができた。その集団の中では自分に確信を持つことができたわけである。

しかし、現代のように違う文化の会社に転職することや、グローバル化のために、異文化に身を置くことが当たり前となると、集団承認で満足することができなくなってしまう。もしその集団ごとに違う価値観に自分の価値観をあわせてしまうと、再び「本当の自分のあり方」とのギャップに悩むことになってしまう。

最終的には、違うコミュニティでもどこに行っても自分は承認されるという確信である「一般的承認」の確信を得る必要がある。しかし、この確信に到達するのは簡単なことではないので、多くの人々が悩むこととなっている。

いまや自分の立ち位置を確認させてくれた大いなる物語とはいえない「資本主義」「民主主義」などを過去のものとし、これらを超える多くの人々が「一般的承認」を感じられる大いなる物語となる社会的なイノベーションが必要なのではないかと考える。

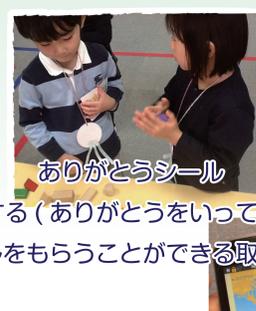


美術を使った教育

既存の価値観ではなく自分の感性・美学「内なる声」に従って、表現することを学ぶ。



共同活動のなかで、他者を知り、自分を
知る。人への貢献を知る。



ありがとうシール

人に貢献する(ありがとうをいってもらう)とシールをもらうことができる取り組み



茶道で自分と向き合う



THANK YOU アプリ
ありがとうシールを
ゲームイクスの技術
を入れて
アプリ化したもの。